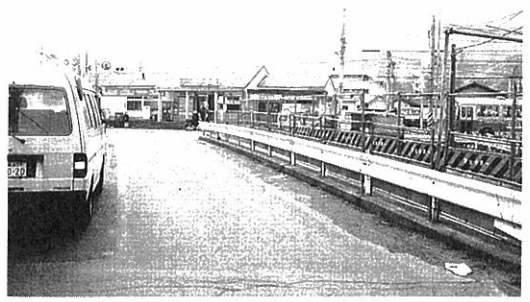




古市薬師寺



古市橋



浄宗寺



古市薬師寺分祠

## 2 古市から八木まで

祇園橋をすぎ右手に安川の堤防と住宅地を見ながら進むと、やがてJR可部線が並行して走り古市橋駅につく。現在JR可部線はそのまま北に延びるが、軽便鉄道時代は駅から右に曲がり古市橋を渡り雲石路に沿って通っていた。古市橋は下からみると橋桁の北半分が太く頑丈になっている。これは、軽便鉄道の軌道がこの橋の北側を通っていた名残である。この橋の下を流れていた安川はこの橋より上流は埋めたてられ、下流は河川公園として整備されている。大正の頃はこの古市橋の先の街道沿いには芝居小屋などが立ち賑わっていたという。

国道五四号線を斜めに越えると古市の集落に入る。古市の集落は、太田川の旧本流である古川と安川にはさまれた自然堤防の上に立地する。交通の要衝でもあり、古代山陽道はこの集落の北を通り安へ抜けていたようである。中世には、武田氏の銀山城下の市場町として発達し、近世に入ると集落の中を通る雲石路が整備され、さらに発達することになる。この古市地方は、古来から麻の産地として知られ、麻製造の歴史は建仁年間(一一〇〇年頃)までさかのぼるといわれる。『芸藩通志』には「居民古市の者は専ら苧を製し」とあり、同書物産には「麻繩、古市村より出す」と記されている。太田川諸村で生産される大麻・麻製品の集散地として、古市は商業的にも大きく発展し、明治から大正にかけて「麻の古市」としてその名を全国に知られるようになった。当時古市の町には煮扱屋が五〇軒あり、煙突が林立し、早朝より黒煙を出していたという。麻糸屋は十三軒あったという。この麻の町古市をささえてきたのは女子労働力であるが、彼女達の労働はきびしく、今なお「おこぎ唄」として語りつがれている。その中の一節には「ひとり娘は古市へやんな師走ご寒日川で住む」と唱われており、当時のきびしい労働の様子が目に浮かぶ。

国道五四号線を越えると道はすぐ分岐する。その分岐点に古市薬師の



三川橋



中古市の町並



オノ木神社



古市一里塚跡（水準点標石）

祠が建てられている。祠の中には石の地藏尊が安置されて道行く人々の安全を見守っている。分岐点の左の道は、先で古市小学校に突き当たり中断しているが、この道はかつて軽便鉄道の通っていた道である。古市小学校をすぎたところに、古市駅が設けられていたが今は空地になっている。

分岐点を真っすぐ行くと下古市の街に入り、両側に商店を中心として集落が発達する。しばらく行くと安佐南区役所が右側少し入ったところに見える。その北側、古川の堤防上に「古市薬師寺」が建っている。この寺は高野山真言宗で、寺は新しく大正九年六月二十三日の創建である。本尊の薬師仏は、大正三年西村亀六氏ら数名が一畑薬師からお迎えしたもので享保年間（一七六一―一七三六）の作ということである。古市は麻で繁栄してきたが、水仕事・ソーダ・灰のアクなどで、皮膚病や眼病を患う人が多く、それを直すためにこの寺がつくられ、多くの人々から信仰されるようになったといわれる。現在この寺は広島新四国八八箇所の一八番霊場になっており参詣者も多い。

安佐南区役所を南に見ながら行くと、右側街道沿いに「浄宗寺」がある。『芸藩通志』に「中筋古市村にあり、竹林山と号す、天正年中僧淨具開基」と記されている寺である。もとはこの地でなく、中筋切戸にあったものだが、明治三十五年現在地に移された。

街道は浄宗寺の先で少し登り坂になり、中古市に入る。この坂を登ったところに西本電気店が左にある。ガラス戸には「麻商西本商店」と書かれており、隣には街道に面して倉が建つ。麻で栄えた時代の面影が偲ばれる。道路反対側には、電柱のかけで、なかば埋もれかけている水準点標石（一〇・二メートル）があるが、この付近に一里塚が設けられていたのではないかといわれている。

西本商店の前の道を右に折れると、下り坂になり、三川橋が出る。上流には神田橋、下流には松原橋が架けられているが、いずれも近代的な



古川河原へ下る石畳の道



古市集落へ下る石畳の道



麻干場跡



扱芋倉庫

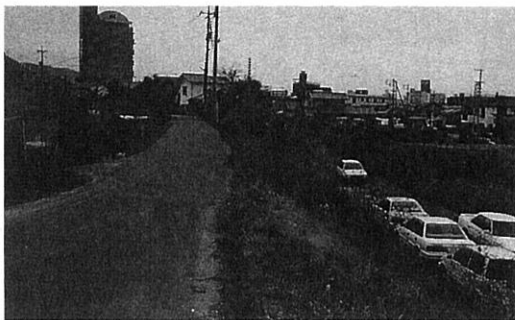
橋になっているのに比べ三川橋は幅も狭く、橋脚も低い。昭和三年に架けられたものだという。昭和二十年の洪水では東半分が落下したというが、古川の増水のたびに通行不能となり危険にさらされている。ともあれ、古市と中筋を結ぶ生活橋として住民にとって大切な役割を果たして現在にいたる。なお、自動車の通行量も多くなってきて橋の南側は木で拡幅され歩道用となっている。また、かつてこの橋の西詰付近には船着き場があったというが今はない。古川には大正初め頃まで、「トウカイ舟」と呼ばれた川舟が上下していたのだが、可部軽便鉄道の開通後次第に姿を消していったようである。

三川橋を渡り、古川左岸堤に出たところに「オノ木神社」が鎮座する。『芸藩通志』では「八幡宮」と記されている。明治四年に現社名に改称した。この神社を厚く崇拜し、祈願所として神田等を寄附したが、「川の内警固衆」と呼ばれた水軍の将福島大和守である。もとは武田の家臣であったが、毛利時代には毛利方につき、畿島の合戦（弘治元年一五五五）では水軍を率いて参加している。福島氏は、この付近を根拠地として勢力をもっていたらしく『芸藩通志』の中筋古市村図には八幡宮の北に「福島宅跡」と「神田」が記されている。「福島宅跡」の北にあたると思われる中筋四丁目二番には、福島大和守の墓といわれているものが、五輪の塔と一緒に残っている。なお福島家ゆかりの寺として、川内三丁目には「明円寺」がある。この寺は福島大和守の二男が、慶長九年（一六〇四）開基し、山号を福島山と称している。

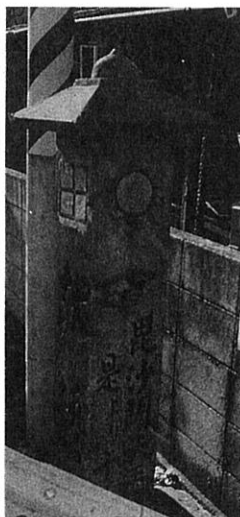
さて、街を北へ進むと、街道沿いに「扱芋（こぎぎ）倉庫」が残っている。この倉は古川で芋扱（おこぎぎ）され干された麻製品が保管された倉である。古市ではこの倉がもつと昔の面影を残している。この倉の北側道路は古川の河原へ下る石畳となっており、この石畳もよく残っている。石畳の先は古川の広い河原となっており、往時、この河原は麻の干し場として利用されていたが、今は畑になっている。石畳は街道を隔て



鎮火記念碑



万歳土手



道標(石灯籠)



久保山神社

た反対側にも残っており、煮拔屋の釜で処理された荒芋を古川の河原まで運ぶ道であったようである。

倉庫と反対側の石畳を下りると、三本の大銀杏の大きさがみえてくる。「久保山神社」である。『芸藩通志』の中筋古市図では、「山王社」と記され、「山王社同村にあり、境内恵美須社あり」とでている。明治四年村社になり、久保山神社と改称された。天保五年（一八三四）の大火（原因は魚屋弥五助という者の煙草の火の不始末であったという）で社殿等すべてを焼失している。境内に入って右側に大火の記念碑が建っている。これは昭和九年に鎮火百年なることを記念し「鎮火壹百年大祭記念碑」として建てられたものである。同じ境内に入ってすぐ右に浅野家の家紋の入った手水盤が手水舎の中に奉納されている。この神社が浅野家の崇敬厚かったことを推測させるものであろう。

上古市には、旧古市町役場がおかれていた。現在は広島市農協古市支所として利用されている。ここをすぎると古市の集落も終わる。そして、新交通システム建設にもなつてつけられた新しい道路を横切り、安川新橋を渡ることになる。安川はもと古市の集落の西側を流れていたが、昭和三十年河川付け替え工事で現流路に変わり古川に合流している。

安川新橋の上流に安川大橋が架けられ、国道五四号が通っている。その上流約二〇メートルのところ、安川は南流し古市の西側を流れていた。その付近に「万歳土手」と呼ばれる堤防が残っている。安川の増水で右岸が決壊すると古市の町が助かるので、そこが切れると反対側の左岸の堤防上で万歳と叫んだことからこの名があるという（村岡幸雄氏談）。

安川新橋を渡ると、街道は国道五四号に合流するが、右手に山陽自動車道広島インターチェンジを見ながら再び国道五四号と分かれ旧緑井村に入る。山陽自動車道の下を抜けると、交叉点があり、毘沙門参道と書かれた看板が右に見える。ここで左に折れるとJR可部線の緑井駅があり、その踏切の西隅に、高さ約一七〇センチメートルの石灯籠が建つて



神宮山古墳



石屋神社



藤高家藪



毘沙門天堂

いる。燈籠には「献燈」「毘沙門天王へ是より十八丁」「大正二年二月」と刻まれている。

ここから毘沙門天堂へ登るまでの平野には、条里制遺構が安川の南北にまたがって残っている。また、「楽音寺神名帳」の(記されている)岩屋明神ではないかと推定される「石屋神社」が、右手の山腹の見晴らしのいいところに鎮座している。この神社をすぎると権現山を直正面にみながら参道を登り毘沙門天堂へ行くことになる。

「緑井毘沙門天堂」は治暦元年(一〇六五)の創建という。正安元年(一二九〇)頃武田氏が銀山城築城の時、北方の守護神としてこの地に願成寺を建てた。願成寺は後に寺町に移転するが、毘沙門堂は残り、商売繁盛など現世利益を願う人々の信仰を集めてきた。毎年旧暦初寅の緑日は大勢の参詣人で賑わっている。なお、現在の毘沙門堂は不審火によって焼失したあと平成二年に再建されたものである。都市化の波はこの参道入口にまで押し寄せてきており、鳥居の前は住宅団地が造成されている。

毘沙門堂に行かず、街道を北に進むと、左手に丸子山(九二四メートル)が見える。この山は松におおわれているが、頂上付近には四世紀後半頃の築造といわれる「神宮山古墳」がある。この古墳からは漢代中期(紀元一世紀頃)につくられた内行花文鏡の破片が発掘されている。この丸子山の麓には「専蔵坊」がある。『芸藩通志』に「緑井村にあり、新宮山と称す、天文元年僧教順開基」と記されている。寺は火災に会っており、すべての記録を失っているとのことで、詳しい由来等はわからない。

右手には国道五四号線沿いに、古川堤防上の竹藪が見える。『佐東町史』には「藤高家藪」と記されているが、残り少ない竹藪の一部である。またこの付近の古川は今はその機能をほとんど失い、「せせらぎ公園」として整備され、多くの人々の憩いの場となっている。

さらに進むと、左側に大銀杏の木のそびえる「黄幡神社」があり、その先は少し下り坂になって太郎橋を渡る。真っすぐな街道をしばらく行



阿武山と権現山



中ノ城跡



梅林園(芸藩通志・国立公文書館蔵)



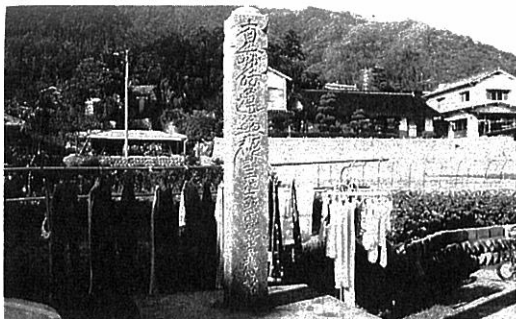
宇那木神社

くと、旧佐東町役場が右に見える。現在は広島市安佐南区役所佐東出張所となって利用されている。旧役場の手前五〇メートル、街道右側には「惠美須神社」がある。隣の中道酒造(今はやめている)に関係したものとされるが、詳しいことはよくわからない。境内には、一等水準点二〇・五九メートルが設置されている。旧役場の反対側はJR可部線七軒茶屋駅である。左手の権現山の中腹には、「中ノ城跡」があり、史跡公園として整備され、桜の名所ともなっている。この城は『芸藩通志』に「緑井村にあり、香川次右衛門所居」とあるだけで詳しいことは不明である。武田氏の銀山城と香川氏の八木城との中間に位置していることから、中ノ城と呼ばれるようになったともいうが確証はない。七軒茶屋駅の北東権現山の麓に、こんもりとした森におおわれた「宇那木神社」が鎮座する。創建の年代ははっきりしないが、甲斐の国から勧請されたものといわれている。境内には、神社祠宮玉木幸直(文政元年〜明治二十八年)の碑が建てられている。

権現山と阿武山の中間に低くなっているところが見えるが、そこが「鳥越峠」である。今は利用する人がほとんどなく荒れているが、戦前までは玖谷の人がこの峠を越えて往来していたという。

雲石路はこの先、広島市北部地方卸売市場付近で旧国道から分かれ古川の堤防沿いに八木市の集落に向かっていった。今は卸売市場の先の道がわからなくなっている。一方、旧国道はJR可部線と並んで北へ延び、JR梅林駅から一直線に八木峠まで行き、峠を越したところで再び雲石路と合流する。

「八木市」の集落は、八木城主香川氏の経営した市場跡と思われる。集落の中央を街道が通り、市場の守護神である胡神社も街道沿いに祭られている。現在は農家が一五〜一六軒集まっているだけである。この集落の中央で街道を直角につらぬく道があり、左へ行くとJR梅林駅、右へ行くと古川を越え、梅林跡に出る。



蛇王池碑



胡神社と八木集落



光広神社



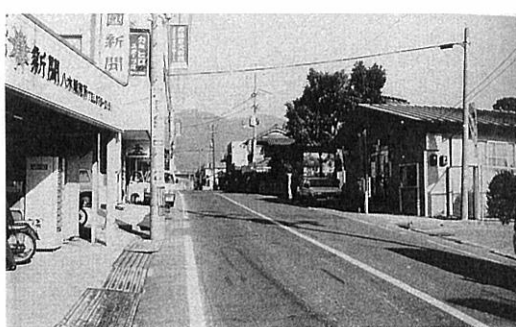
観音堂

「八木梅林」は『芸藩通志』の名所図にも描かれている。別名「米溪園」とも言う。空海が昼食に食べた梅の実を植えたのがはじまりといわれるが、この地は旧太田川本流の河床で、梅林は存在していなかったはずだから、もっと新しい時代に開かれたと考えるべきであろう。慶長十二年（一六〇七）、太田川は流路を東寄りに変え、ほぼ現在の流路を流れるようになった。八木梅林の梅はこの旧河床に梅を植えはじめられたのではないだろうか。明治四十二年十一月可部軽便鉄道が開通してから梅の名所として賑わったが、その後、草津の荒手に梅林が開かれたり、昭和十八年、二十年の大洪水で大きな被害を受けてから閉鎖されてしまった。わずかに梅の木が残っているが、跡地は工場用地となったり、畑に利用されている。

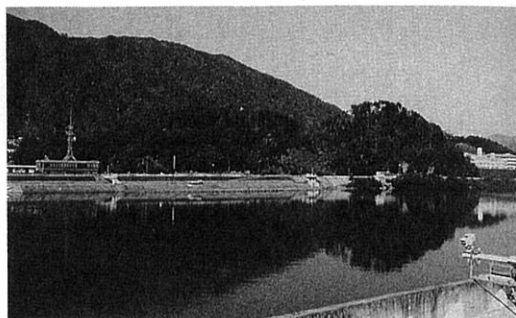
八木市の集落の北には「阿武山」（阿生山、又蛇山とも書く、標高五八六・八メートル）がそびえる。この山は雲石路のどこからでもみえる山でその姿は秀麗である。古代から素朴な自然信仰の聖地として崇められてきた。中世以降は観音信仰の聖地となつてゆく。山頂には観音菩薩がおかれていたが、弘化四年（一八四七）に山頂から降ろされ、八木上築地に「観音堂」を建て安置された。山頂では昭和十四年と三十六年に雨乞い行事が実施されている。山頂付近には貴船社の小祠もおかれている。

山麓は『陰徳太平記』に出てくる香川勝雄の阿武山大蛇退治の伝説地となっている。阿武山には昔巨象を飲み込むほどの大蛇が出没し往来する人々を悩ませていた。そこで、一八歳一五人力の香川勝雄が大蛇を退治する話というのがそれである。切り落とされた首が飛んで落ちた凹地が蛇王池とよばれた。その場所はよくわからないが、JR梅林駅の裏手に「蛇王池の碑」というのが建てられている。碑は住宅地の中に建てられている。便宜的にその場所に建てたということだが、碑の北五〇メートルのところには池（野菜などを洗うのに使用されている）があり、それと

り囲むように、刀山・刀川という家がある。



八木峠



八木城跡



権五郎神社

碑の西側には「光広神社」が鎮座しているが、この神社は香川氏の祈願所となっていた。香川勝雄の大蛇退治の大刀が奉納されていたということだが、今はないという。

八木市の集落を過ぎてから、雲石路は城山の麓を迂回しながら八木峠に至る。「八木峠」は、阿武山と城山にはさまれた峠で標高二・〇メートル、古くから交通の要所であつたらしく、『芸藩通志』の八木村絵図をみると峠付近に「セキシロ」という地名が記されている。関所が設けられていたのかも知れない。また、一里塚もこの峠付近に設けられていたようだが、その跡は残っていない。軽便鉄道時代は交通の難所で、乗客が降りて押していたこともあつたそうである。現在この峠には、JR可部線、新国道五四号、旧国道と雲石路が交叉し合つて集中し、交通路としてその重要性を失っていない。

この峠の北、阿武山山麓には昭和四十七年十月に町営八木別所団地が造成されたのを皮切りに、住宅地化がはじまり、広島市のベッドタウンとして急速に発展しつつある。

八木峠の右手の山は城山（六九・二メートル 釈迦山ともいう）で、ここには承久の変（一二二）後、香川氏が安芸国佐東郡八木村の地頭職に任じられ城を築いている。東側は太田川に面し急崖をなし、西側は八木峠を見おろす地形上の有利さからここを選んだものと思われる。本丸跡は城山を中心に東西三五メートル、南北二〇メートルで二の丸跡はその東側にある。西側には香川氏の祖、鎌倉権五郎景政を祭る「権五郎神社」（景政社）ともいう「芸藩通志」の祠がぼつんと立っている。城跡の南西は「土居」といい（芸藩通志）では「土井」、八木城主香川氏の屋敷跡という。平時は香川氏を中心に一族郎党が屋敷を構え居住していたものと思われる。城山に登ってみると、周囲の展望が開け、北には可部高松城跡、東には惠下山城跡などがみわたせる。

峠の西には「浄楽寺」がある。元和五年（一六一九）僧順超によつては

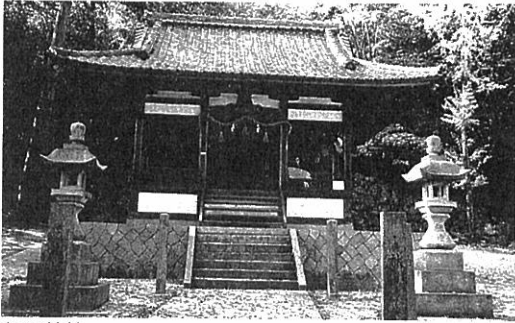




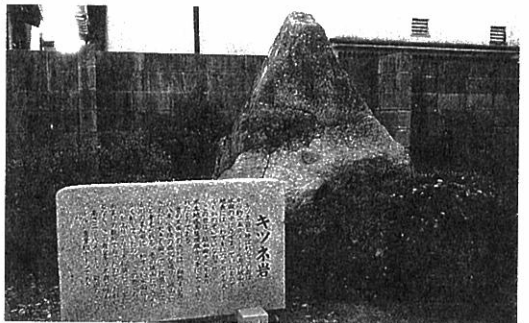
太田川橋



浄楽寺



細野神社



キツネ岩

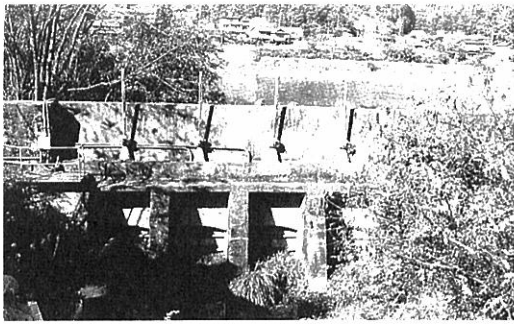
じめられたとある。本堂は明治十一年から四年の歳月をかけて、可部「福王寺」の本堂を移築している。八木小学校の前身の「友聲社」が明治七年、この寺の法堂をかりて熊野貫造らによってはじめられている。

峠を越え坂を下った雲石路は、八木用水沿いに細迫の集落の前を北上する。JR可部線がすぐ右側を走る。右手に安佐酒造がみえる。この会社は、阿武山の良質な地下水を立地条件として明治の頃から酒造業を営んでいるという。その反対側、細田山（現在は削られて細田圃地が造成されている）の麓に「観音堂」がある。自然石の観世音菩薩と火之迦具神を合祀している。

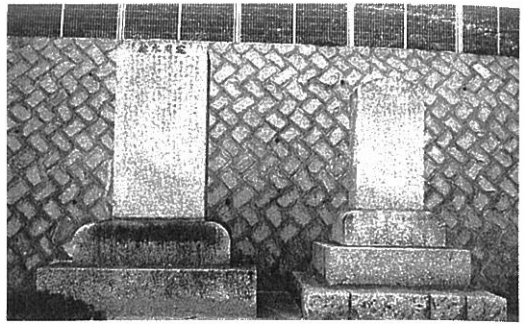
八木小学校正門の左側の隅には「キツネ岩」と呼ばれる、高さ二・八メートル、重量約一〇トンの岩が保存されている。もとは城山の北の水田の中に六〇センチメートルほど出ていた。太田川の真中であつた時代に、船にとって難所となつていた岩といわれる。

八木小学校をすぎると右手にJR上八木駅があるが、この先で街道はJR可部線と分かれ、太田川橋西詰で国道五四号を横切る。「太田川橋」は明治十九年に初代の橋が架けられ、現在は四代目である。三代目は解体され、三次の祝橋として現在なお利用されている。交通量の増加にもない、四代目太田川橋のすぐ上流に新太田川橋が架けられたが、渋滞は解消されるに至っていない。

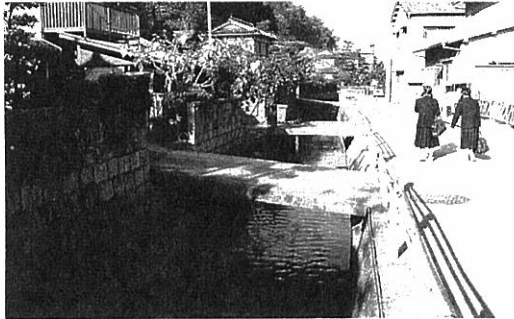
国道五四号を越え太田川の堤防上の道路を行くと、右前方に可部の町と高松城跡、左に太田川発電所がみえてくる。そのすぐ北に「細野神社」が鎮座する。この神社はもと八木十分一にあつたというが、その由来等はよくわかっていない。この神社の下、県道に面して「熊野忠左衛門の碑」と「定用水碑」が並んで建っている。熊野忠左衛門（二七九一―一八七三年（一八五〇）の洪水の時、堤防の大改修を行うなど村のためにつとした功績がたえられ、明治八年に村民の手によってこの碑がたてられた。



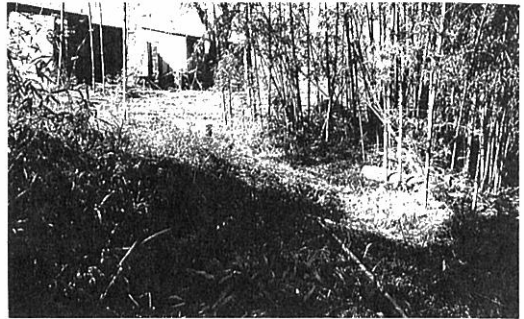
常用水現取水口



常用水碑と熊野忠左衛門碑



上八木迫細集落付近の常用水



常用水旧取水口

「定用水碑」は、八木用水を完成させた卯之助(享保九年〜天明三年)一七二四〜一七八三)の子桑原己之助が文化十四年(二八一七)に建てたものである。

「八木用水」は、本来は「定用水」「常用水」といい、八木用水と呼ばれるのは明治以降のことである。明和五年(一七六八)卯之助によって完成させられた用水路で、八木・緑井・中須・古市・西原・長束・祇園・楠木・打越の九か村にまたがり、全長一六キロメートルにも及ぶ。この用水の完成によって水田三〇〇町が灌漑され、多くの農民を水の悩みから開放した。完成当時は「卯之助井手」と呼んでいたという。用水の取水口は八木十分一であったが、大正八年(一九一九)の大水害で堰が流失したり、太田川発電所の建設によって、川水位が低下したことにより、現在の取水口は一・五キロメートル上流の鳴に移されている。八木十分一の取水口は、太田川遊園の中にあるが、太田川河床との高低差が五メートルもあるのに驚くばかりである。用水路は現在すべてコンクリートで固められている。取水口付近の水は比較的きれいであるが、八木・緑井と末端部にいくにしたがって、汚れがドブ川に近い状態になっていく。八木用水の受益面積も昭和三十年には一五〇ヘクタールあったのが、昭和四十年には四〇ヘクタールと最近の都市化によって激減している。

(林 善久)